（明治二十五年十二月～同二十八年五月）であった。川崎の後は関保之助、福地復一、前田香雪、および久米桂一郎（西洋考古学担当）らに引き継がれた。

川崎千虎の「考古学」講義に関する資料としては左記のものが現存する。

「考古学」一冊

これは原安民が鋳金科第二年のとき（明治二十五年九月～同二十六年七月）に筆記したノートである。原は普通科終了後、規則改正（明治二十五年）により直ちに本科（鋳金科）第二年となったため、本科第一年の履習科目である「考古学」を第二年で受講したと考えられる。

このノートによれば、川崎千虎は最初に西洋の考古学の時代区分について一応説明し、自分としては今泉雄作の立てた時代区分をとりながら、それを簡略化して、神代、太古（神武～光仁）、上古（桓武～近衛）、中古（後白河～花園）、近古（後醍醐～後陽成）、近古（後水尾～考明）という区分を用いると言っている。そして、その区分に従って各時代の人事（儀式、祭祀、技芸、游興）、衣服（男女服装、携帯品、武装および武器）、食（飲食）、住（建築、装飾、庭園）、地理（古今の沿革）について述べると言っている。しかし、講義は川崎の本領である衣服（殊に武装、武器）に重点を置いて進められている。

川崎千虎は大和絵系統の画家であり、学者でもあった。本校の講義を始める以前から長編の「本邦武装沿革考」を『国華』に発表している。

関保之助の「考古学」講義

関保之助は本校第一回卒業生で、石川県工業学校教諭の職を辞して明治二十八年十二月に母校嘱託となり、翌年助教授となったが、美術学校騒動の際に辞職している。講義に関する資料としては山下英夫（明治三十二年鍛金科卒）の筆記ノート「関保之助氏口述、考古学儀式及武器之部」がある。このノートには明治三十年九月の年記があり、はじめの部分は朝廷における諸種の儀式とその用具、支那の儀式との関連などの図入り解説が筆記されている。そのあとに、関が配布したと思われる印刷物の綴入みがあり、内容は序論・有職（公卿の礼式作法）と古実（武家に関する事柄）についての説明、本論・武家の故実（弓、矢、靫、槍、旗、鉾、鉄炮（ママ）、刀剣、甲冑等々各種の武器の変遷を古文献や実物に即して説く）からなる。さらに、そのあとにこの印刷物の甲冑の部分の続きに該当する筆記と法衣に関する筆記があってノートが終っている。このノートからみて、関の「考古学」も川崎千虎と同様、専ら有職故実に関するものであったことがわかる。

加納夏雄、黒川真頼の「金工史」講義

この科目は明治二十三年の規則改正後、美術工芸科金工専修第一年生の履習科目として新設された。最初の担当者は正式記録の上で